

Data Special

市場心理を映し出す

日本の“恐怖指数” 日経VI

Nikkei Volatility Index

CONTENTS

- Nikkei VIの概要
- Nikkei VIと先物
- Nikkei VIと個別株
- Nikkei VIと個別株＜順張り40銘柄＞
- Nikkei VIと個別株＜逆張り40銘柄＞
- 終わりに

2018年は波乱の多い相場でした。その皮切りは、米国市場の2月2日の大急落。このとき市場参加者に大打撃を与えたのは、株価の下落もさることながら、ボラティリティーの急上昇です。それ以前、1年以上にもわたって「株価は安定的な上昇、ボラティリティーは低水準」という状況が続いていました。そうした局面では、株を買い、ボラティリティーを売るという戦略が極めて有効。言うなれば「それさえやっていたらラクラク儲かる」モデルです。ところが、2月2日に全く逆のパターン「株価は急落、ボラティリティーは大爆騰」となり、「ラクラク儲かる」モデルは一転して「巨額損失」モデルと化しました。市場が急変したときのボラティリティー変動の大きさをたると、株価の比ではありません。まさにボラティリティー恐るべし、です。

市場のボラティリティーを表すボラティリティー指数は、株価指数オプションの取引値から算出される予想変動率のもとになっています。市場動向を表現するインデックスが数ある中で、このボラティリティー指数は「市場参加者の先行きに対する心理」を反映しているという点で一種独特といえるでしょう。安定した先行きが予想されているならば指数は低く、先行き不安が増すほど指数は上昇する。不安がピークに達すると指数は大爆騰。個々の市場参加者に「市場の先行きをどう予想しているか」を聞いて回ることは不可能ですが、この指数の動きを見ることで、市場の不安が拡大しているのか、ひとまず落ち着いたのか、その変化を知ることができます。

2019年の市場に関しては、昨年の荒れる相場がまだ続くとの見方も少なくないようです。そこで、日本のボラティリティー指数「日経VI」に焦点を当ててみました。調べてみると、市場心理はもとより、先物や個別銘柄の売買にも活用できそうな結果も出てきました。

一般にはそれほど気にされていない指数ですが、用途は意外に広いのではないかと思います。今年は、日経平均株価をはじめとする株価指数に加えて、「日経VI」にも注目してみてください。